

月刊

kasugai Free Magazine

2013 SEP  
vol.07

9

# はる

◎ 春日井市内のサークルK サンクス 全店舗無料設置中!!

スマートフォン版新登場!  
さらに使いやすくなりました!

はる掲載店が  
ケータイ&スマホで探せる!  
モバイル版 はる




フリモ会員数 87,357名  
(2013.8.16現在)

巻頭特集 福島の子どもたちを支援

## 雨にも負けずプロジェクト



- ◆ 秋の味覚祭り! 秋グルメ特集 食欲の秋
- ◆ 今年の秋は何を学ぶ? SCHOOL GUIDE
- ◆ サッカーコラムスタート! 教えて! ゲルト・エンゲルスさん

「フリモ」会員登録して豪華賞品GET! (詳細は内面にて)



甲子園で愛工大名電と聖光学院が1回戦で激突しました。その試合を密蔵院に来ている福島の子どもたちが応援していましたが、その風景は少し変わったものでした。福島の子どもたちは、すべて聖光学院の所在地の伊達市からやってきています。本来なら子どもたちは聖光学院を応援するはずですが、愛工大名電にも同じように声援を送っていました。なぜなら、その試合の1週間ほど前、子どもたちは愛工大名電野球部を訪問し、キャッチボールをしたりバッティングを教えてもらって交流を深めていたのです。

福島と春日井は、距離的に決して近くありません。しかし、人と人が結び付くと距離とは関係なく、とても近い場所になります。雨にも負けずプロジェクトが福島の子どもたちを受け入れて2年半。中には、何度も春日井に来ている子どもたちもいます。その子たちにとって、春日井市は多分とても近い所を感じていると思います。

福島の現状を我がこのように受け止めて、懸命にお世話をしている中部大大学院の松原啓君を始め若いボランティアの皆さんにとっても、福島はとても近い場所なんだろうと感じました。



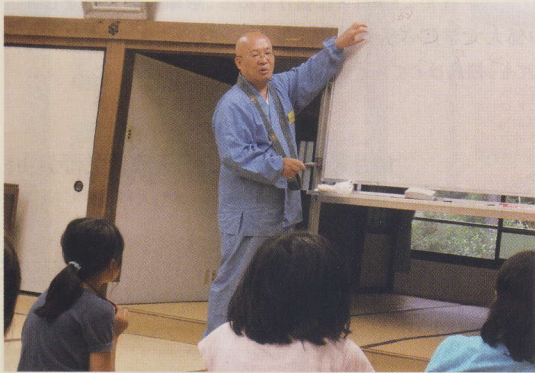


自分たちでつくった書とアクリルたわしを手にする子どもたち

# 雨にも負けず プロジェクト

巻頭特集 福島の子どもたちを支援

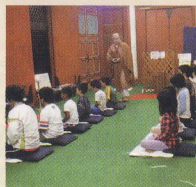
せめて休みの期間だけでも放射能の影響を気にすることなく、のびのびと過ごしてもらおうと、福島県伊達市の子どもたちを春日井市に招く「福島っ子キャンプ」。この取り組みの企画運営を担っている市民団体「雨にも負けずプロジェクト」の代表、中川國弘さんに話を聞くため、キャンプが行われている熊野町の密蔵院を訪ねた。



密蔵院田村圓心住職の説法を真剣に聞く子どもたち



創作タイムで書道の指導をする波多野明翠さんとアクリルたわし作りを指導する岩田正子さん



比叡山延暦寺の修行。座禅や雑巾がけにも真剣に取り組んでいます

子どもたちにとっては、すべてが遊び場（密蔵院宿坊にて）

## 保護者らの思いにこたえて 子どもたちの一時疎開を

「福島っ子キャンプ」に参加している小中学生だ。

2011年3月11日、東日本を未曾有の大地震が襲った。揺れだけでなく、地震により発生した津波が太平洋沿岸部に壊滅的な被害をもたらした。のちに東日本大震災と名付けられたこの震災の復興支援のために宮城県に入っていた中川國弘さんは、仙台で開かれた支援団体会議の場で、福島の子どもたちが危ない、という話を聞く。

6月末、中川さんは福島県伊達市に向かった。着いた先には緑豊かな山々に囲まれた風光明媚な里が広がっていた。しかし、ここは福島第一原子力発電所事故の被災地域でもあった。原発からおよそ50キロ離れているにもかかわらず、ホットスポットと呼ばれる放射線量が局所的に高い場所が市内各所に出現し

医王山薬師寺密蔵院。かつて3千人の僧侶が学んでいたという天台宗の寺院である。境内には真夏の日差しと蝉時雨が容赦なく降り注いでいた。国指定重要文化財の多宝塔を仰ぎ見ていると、庫裡の横に建つ宿坊から甲高い声が聞こえてくる。足を運んでみれば、そこでは子どもたちが元気いっぱい遊んでいた。

子どもたちにとっては、すべてが遊び場（密蔵院宿坊にて）

福島でできない水遊びもこちらではOK。お寺の横の小川でザリガニ捕り





甲子園に出場した愛工大名電野球部員との交流



中京大学チアリーディング部のリフトに大喜び



ボランティアの皆さん力作の流しうめんを楽しむ子どもたち

ていたのだ。

「まちに子どもたちが遊ぶ姿はなく、家々の窓は全部閉め切つてある。洗濯物はすべて屋内。空気に触れないよう、登校はクルマを利用し、学校の玄関から逃げるように校舎に駆け込んでいく小学生たちを見ました。ぼくたちが訪れたとき、こんな異常な光景を目の当たりにしたので」と中川さん。

子どもや孫たちを放射能から遠ざけたい。夏休みの間だけでいいから愛知に連れて行つてもらえないか。子どもたちだけでも助けてほしい。保護者の悲痛なまでの願いを前にして、中川さんは「わかりました」と答えてしまう。「そんな計画を携えて伊達市に入ったわけではなかったの、それからが大変でした。何の当てもなかったんですよ」と振り返る。

宿泊場所や世話をしてくれる人たちの手配など、夏休み直前のわずか1カ月ですべての準備を整えなくては、福島の子どもたちを受け入れることができない。密蔵院の田村圓心住職や市内の飲食店「末広」の脇山順市社長をはじめ、多くの人たちの善意や協力を得て、キャンプ開催にまでこぎ着けた。

寺の食堂やお風呂の改装、そして空調設備まで整えて子どもたちを受け入れた田村住職は「皆ができる範

囲で支え合えばいいんです。密蔵院もできることを当たり前前に協力しているだけ」とさりげなく言う。

そして2011年8月1日、伊達市から子どもたちを乗せたバスが到着。23日間のサマーキャンプが始まった。以来、ウインターキャンプ（冬休み）、スプリングキャンプ（春休み）、サマーキャンプ（夏休み）と休みのたびに子どもたちを招き、今夏で7回目を迎えた。

### 子どもたち自身で未来を切り開いていけるように

キャンプに参加している子どもたちに感想を聞いてみた。最初は恥ずかしそうにしていたが、ひとりが口火を切ると次々に話し出す。「きもだめし大会が面白かった」「比叡山はきつかった」「ザリガニを捕まえたよ」など楽しそう。でも「放射能を心配しないで長く外にいられるのがうれしい」「愛知に来たら放射能がないから普通に外で遊べる」と、子どもたちが「放射能」という言葉を当たり前のように口にすると、心がざわつく。

こんな話も中川さんから聞いた。夜の宿坊。「自分たちはいつまで生きられるのだろうか」「ガンになるかもしれない。白血病になるかもしれない。だからぼくたちには未来はな



移動手段はいつも「末広」さんがバスを無料提供。脇山社長と専務が自らハンドルを握って福島っ子キャンプをサポートします

大丈夫だ。そう言つてあげられるよう、3回目くらいからキャンプのあり方を見直したのです」

ものづくりの現場を訪れたり、世界で活躍するスポーツ選手と交流を持つたり、比叡山で修行をしたりと、さまざまな体験を通じて自分たちの未来や目標について考えてもらおうというのだ。そして、これらの機会を提供してくれる人たちに感謝する心も忘れないよう指導している。

キャンプは希望の光です、という手紙が福島から届く。未来を託す子どもたちのために希望を持たせてもらえる場所として、福島っ子キャンプへの保護者の期待は大きい。「縁ができた以上、ぼくたちはそれに、こたえていかなくてはいけない。今は目の前のことを一杯、コツコツとやっていくだけです」と話す中川さんの視線の先には、楽しそうに遊ぶ子どもたちの姿があった。



中川 弘樹さん

「雨にも負けずプロジェクト」代表の中川弘樹さん。「福島っ子キャンプは本当に多くの方々の温かい支援によって成り立っています。それでもキャンプの運営には多額の経費が発生します。ぜひ財政面でのご支援もよろしくお願いたします」と呼びかける。



松原 啓三さん

学生のボランティアスタッフのリーダー、松原啓三さん(中部大学大学院生)は2回目のキャンプからボランティアとして参加。子どもたちが楽しいと話す。子どもたちが福島へ帰った後も交流があり、写真付きのメールなどが届くそうだ。

### ■ information ■

食材や支援金などのほか、共に活動する仲間も募集中。支援協力の詳細は、雨にも負けずプロジェクトのホームページ(<http://amepro.org/>)を。撮影などでの参加も受付中。雨にも負けずプロジェクト 問合せ 0568-41-8430(密蔵院内)

文/長屋整徳 デザイン/大澤亜里紗